

## 論 文

# 長期ジュニア・ライフセービング・プログラム経験が 幼児・児童期のたくましい社会性に及ぼす効果

國木 孝治\*1

キーワード：ジュニア・ライフセービング、海洋教育、自然体験活動、長期体験型、たくましい社会性

### 1 研究に至る背景と目的

旧学習指導要領から創設された総合的な学習の時間は、従来の教科枠を超えたテーマを設定し、何よりも児童・生徒が具体的な体験活動を通して、自ら学ぶ力や学び方、調べ方などを身に付けていくことがねらいとされた。現学習指導要領では、生きる力<sup>註1</sup>を育む理念のもと、従前と同様に体験的な学習活動を積極的に取り入れることが求められている。体験活動の具体例としては、自然の偉大さや美しさに出会ったり、その中で友達と関わったりしながら協同的に学ぶ自然体験活動が挙げられる。自然と関わる体験活動を通して、自分と向き合い、協働作業や共同生活を営むことができる社会性、他者の個性を尊重する態度、日々新たに生じる課題に立ち向かおうとする意欲や問題解決能力、精神力や体力、新しい物事を学ぼうとする意欲や興味・関心、自然に親しむ心等の生きる力が根づいていくと考えられる。なお、現在の児童・生徒を取り巻く社会環境の中では、自然の中での遊び体験が不足しており、自然との関わりを深める教育が大切であることから、水辺活動等の実施が奨励されている。加えて、生きる力を育むためには、学校での組織的・計画的な学習を行う一方で、地域社会の中で様々な自然体験を抱負に積み重ねることが大切であると思われる。

水辺における体験活動を実施するにあたっては、安全は第一に優先されるべき事項である。自然の中で実施される活動ではある種の危険が内在する。しかし、単に生命を水から遠ざけるのではなく、水と親しむこ

とによって危険を回避する姿勢を養う教育を目指さねばならない。そこで現在、幼児・児童・生徒期におけるライフセービング<sup>註2</sup>プログラムの教育的効果に期待が寄せられている。

我が国における教育としてのライフセービングの現状については、千原らによって諸外国の先進事例が紹介されている<sup>1-2)</sup>。加えて、遠藤、小峯、丸田、日本ライフセービング協会らによってプログラムの体系化が試みられてきている<sup>3-6)</sup>。また、これら諸研究を基にして、地域ライフセービングクラブやNPO法人が、幼児・児童を対象としたライフセービング・プログラム(以下「ジュニア・ライフセービング・プログラム」)を実施しており、全国への広がりをみせている。現在、地域クラブやNPO法人等地域団体が主宰する、年間を通じたプログラム実施がなされているところは全国10数箇所程度在る。しかし、中でもある一定の期間(例えば夏季期間中)において連続した長期間の実施がなされているところは稀である<sup>註3)</sup>。

ところで、自然体験活動の意義や目的、課題等を考える際には、文部科学省による報告『青少年の野外教育<sup>註4)</sup>の充実について』が参考になる<sup>7)</sup>。このうち本研究では、課題として挙げられている、①実施期間の長期化やゆとりある活動時間の配分の改善<sup>註5)</sup>、②調査研究の充実<sup>註6)</sup>に注目した。自然体験活動の成果はその継続と反復によって定着していくと考えられる。したがって、長期体験型のプログラム開発や実施は、自然体験活動の充実を図る上で重要であると考えられる。他方、多くのプログラムでは、体験後の参加者から「感

\*1 至誠館大学 ライフデザイン学部

動した」「楽しかった」等の声や、指導者からの「有意義な活動ができた」「子どもがひとまわり大きくなった」等の感想が聞かれる。これら主観的な満足感や経験論的な評価は、成果を裏付ける重要な要素の1つではあるが、客観的評価に乏しく、調査研究を充実、蓄積していくことは有益であると考え。

さて、現学習指導要領における生きる力を育む理念のもと、従前より“たくましく生きる”というキーワードが構成要素の1つとして示されており、激しく変化する社会に主体的に対応するために必要なものであるとしている。この“たくましさ”について、二宮<sup>8)</sup>は“たくましい社会性”を育てることが重要であると述べている。たくましい社会性とは、「円滑な対人関係がとれ、他者との関係を築き、維持・発展させ、その中で自己の欲求を実現できる能力」と定義している。そしてこのたくましさには、「人と人との関わる社会的場面において、他者との関係を構築しそれを維持・発展させる側面《調和》と、自己の欲求を実現し自分らしさを発揮する側面《独自性》がある」と述べている。さらに、《調和》の要素には、他者との関係を築く感情的側面として[共感性]、その能力の自己認識としての[向社会的コンピデンス]がある。《独自性》の要素としては、自己の欲求を実現する能力の感情的側面として[自立感]、その能力の自己認識としての[自己効力感]を挙げている。本研究ではこの2側面4要素に着目した。

自然体験活動が幼児・児童に及ぼす効果等についての研究事例として、キャンプ経験や冒険プログラムにおける、たくましい社会性、生きる力、自己概念の変化や感性、自己効力感に及ぼす影響等についての事例が数多くみられる<sup>9-30)</sup>。

つづいて、水辺（河川や海洋など）の体験活動に限定するものとしては、学校教育下における総合的な学習の時間を活用したウォーターワイズプログラムの実践と効果等についての研究事例がみられる<sup>31-34)</sup>。

他方、自然体験活動を評価するための尺度や、自然

体験活動が自己概念に影響を与える要因について研究された事例としては、効果測定尺度の開発、自己効力感尺度の検討、生きる力を構成する指標に関する研究等が挙げられる<sup>35-37)</sup>。

これらの先行研究を総すると、次のことが課題として挙げられる。1つは、自然体験活動が参加者の社会性に及ぼす影響について、既に多くの研究者によって分析がなされてきてはいるが、その対象となる活動の主体がキャンプであること。2つ目は、水辺における自然体験活動に関する研究は限られていること。中でも、ジュニア・ライフセービング・プログラムに関する研究は、プログラムの紹介、開発、教育プログラムとしての可能性に言及されており、プログラムを行うことによってどのような効果があるのかといった客観的な効果分析、評価測定されたものではない。

そこで本研究では、通い型で且つ長期的な自然体験活動を実施しているプログラムのうち、海浜や海洋を活用したジュニア・ライフセービング・プログラムに着目し、プログラムに参加した幼児・児童のたくましい社会性に及ぼす効果とその持続性について明らかにすることを目的とした。

## 2 研究方法

### 2.1 対象プログラムとプログラムの概要

2016（平成28）年の夏季中において、山口県萩市・菊が浜海水浴場及び周辺海域で実施されたジュニア・ライフセービング・プログラム「萩ZZサーバー2016 - summer act-」（以下「萩ZZサーバー」）を対象とした。

当該プログラムは、“海が先生”をコンセプトに、ウォーター・セーフティ（水辺の自助・共助）の知識や技術を獲得していきながら、楽しく水と親しむことにより危険を回避する姿勢を養い、たくましく生きる力を育むことを目的とした自然体験活動プログラムである。

このプログラムの開催は、2016（平成28）年7月18日（月）から同年8月21日（日）までの35日間のうち、一部平日を除く延べ31日間・延べ59教室（午前2時間、午後2時間、1日2教室）が計画され、天候不良等の理由により実際に実施された日数および開講数は延べ29日間・延べ50教室であった。

なお、このプログラムへの参加は、1回（1教室）の参加から、開催期間中何度でも参加することが可能であり、最少参加者は1回、最も多く参加していた者は全日程50教室であった。なお、参加者の半数以上が複数回参加していたことから、参加リピート率のあるプログラムであることがわかる。

主なプログラム内容は表-1のとおりである。

1回2時間のプログラムのうち、概ね前半部は海水浴場内（海浜および足の届く海域）においてウォーター・セーフティに関する講話や実技が用意され、続いて後半部は獲得した知識・技術を活用して足の届かない海洋を冒険する体験活動が中心であった。なお、その日の参加者層（参加回数や年齢等）や天候・海況に応じた柔軟な対応がなされており、幼児・児童の興味・関心に沿ったプログラムが展開されていた。

洋上における参加者の安全については、常時ライフセーバーが配置されており、何よりも1回の参加受入人数を制限していること（～15名まで）、及び保護者の参加があることで、目の行き届く水上安全体制が確立されていた。

表-1 プログラム内容

時間	初心者/初回参加者	熟練者/複数回参加者	場所
20分	海の安全について（講義形式） ビーチコーミング	監視活動体験 ビーチクリーンアップ	海浜
20分	PFD着用 PFD背浮き（熟して待て）体験	ウォーターセーフティ・プログラム	浴場内
20分	水慣れ（足の届く場所）	器材を使用しての水慣れ	
60分	海洋冒険クルーズ（イカダ漕）	マリンスポーツ体験 （1人で漕ぐ器材を使用）	沖合
	海洋浮遊体験（PFD着用）	オープンウォータースイミング （浮力体を身近く確保して）	
	水中観察 水中ジャンプ（イカダ遊び）	シュノーケリング 磯場漂着物調査	
5分	振り返り	振り返り	海浜

## 2.2 対象者

当該プログラム開催期間中の総参加幼児・児童者数は延べ417名（複数回参加者を1名としてカウントした場合の参加幼児・児童者数は130名）であった。このうち、年少以下の参加者を除く、保護者の調査承諾を得た106名の幼児・児童を対象とした。

有効回答数は81名（有効回答率76.4%）で、参加者の属性（性別、学年）については次のとおりであった。

### 1) 学年

- (1) 年中：5名（6.2%）
- (2) 年長：13名（16.0%）
- (3) 小学校1年生：19名（23.5%）
- (4) 小学校2年生：6名（7.4%）
- (5) 小学校3年生：9名（11.1%）
- (6) 小学校4年生：13名（16.0%）
- (7) 小学校5年生：7名（8.6%）
- (8) 小学校6年生：9名（11.1%）

### 2) 性別

- (1) 男子：36名（44.4%）
- (2) 女子：45名（55.5%）

## 2.3 調査の手法

同内容の調査票調査を計3回実施した。

具体的には、参加初日のプログラム開始直前に①事前調査を実施（Pre）。続いて、各参加者の参加最終日のプログラム終了直後に②事後調査を実施（Post-1）。さらに、各参加者の参加最終日から1ヶ月後に③追跡調査を実施（Post-2）した。

調査票調査の方法は、①②は集合調査法により、③は郵送調査法により実施した。

なお、調査票が読めない幼児に対しては、保護者に読んでもらい、記載してもらった。

## 2.4 調査の内容

参加者の性別や年齢等の基礎情報のほか、津久井<sup>21)</sup>による研究結果<sup>註7</sup>を基にして12項目の質問項目を作

成した（表-2）。具体的には次のとおりである。

他者との関係《調和》を築く感情的側面についての効果を知るための尺度として (1) [共感性]、その能力の自己認識としての (2) [向社会的コンピテンス]、以上の2因子から各2項目（計4項目）の質問を本研究において採用した。

つづいて、自己の欲求を実現する能力《独自性》の感情的側面として (3) [自立感]、その能力の自己認識としての (4) [自己効力感] ((4)-1 失敗に対する不安、(4)-2 能力の社会的位置づけ、(4)-3 行動の積極性)、以上の4因子から各2項目（計8項目）の質問を本研究において採用した。

各質問項目の回答は5件法で実施し、「よくあてはまる」を5点、「どちらかといえばあてはまる」を4点、「どちらともいえない」を3点、「どちらかといえばあてはまらない」を2点、「ぜんぜんあてはまらない」を1点として得点化した。値が高いほど、その項目の獲得レベルが高いと解釈される。逆転項目の値は得点算出の際に反転処理された。

なお、参加者の参加回数や参加日数等の基礎情報については、主催団体が所有しているプログラム参加申込書類を基にした。

表-2 分析の尺度と質問内容

調和	共感性	
	Q1. こまっているひとを見ると、たずけてあげたくなる Q7. かなしんでいるひとや、ひとりぼっちのひとはなしをきくと、なんとかたずけてあげたくなる	Q2. かなしそうにしているひとを、ほげますことができる Q8. ともだちや、なかまをたずけることが好きだ
独自性	自立感	
	Q3. なにかをしたいか、なにかをするかはじぶんできめる Q9. じぶんがたのしいとおもうことは、やるようにしている	Q4. なにかをするときに、うまくいかなかったらしんぱいになることがはばい (R) Q10. まえのしつぱいや、いやなことをおもいだして、くらいきもちになるほうだ (R)
	自己効力感	Q5. じぶんは、よのなかのやくにたてる人だとおもう Q11. じぶんは、ともだちよりもすぐれたのうりよがあるとおもう
		行動の積極性

R：逆転項目

## 2.5 分析方法

参加者のプログラム参加回数によって3グループに分類し (i) 1回、(ii) 2-4回、(iii) 5回以上)、調査時期

(①事前調査 (Pre)、②事後調査 (Post-1)、③追跡調査 (Post-2)) 間の差異について分散分析を行った。

統計処理にはSPSS Statics Ver.23 を用い、その際の有意水準は5%とした ( $p < 0.05$ )。

なお、参加回数の内訳は次のとおりであった。

- (i) 参加1回：n=37 (45.7%)
- (ii) 参加2-4回：n=21 (25.9%)
- (iii) 参加5回以上：n=23 (28.3%)

## 3 結果と考察

### 3.1.1 調和：共感性

表-3・図-1 は、他者との関係を構築しそれを維持・発展させる側面《調和》のうち、他者との関係を築く感情的要素である (1) [共感性] についての結果である。

(i)参加1回のグループにおいては、全ての調査期間において有意な差はみられなかった。

(ii)参加2-4回のグループでは、①Pre-②Post-1 間において有意に高くなる値を示し、②Post-1-③Post-2 間において有意に低くなる値を示した。

(iii)参加5回以上のグループでは、①Pre-②Post-1 間と①Pre-③Post-2 間において有意に高くなる値を示した。

表-3 調和：共感性

参加回数	調査時期(I)	平均値	標準誤差	調査時期(J)	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率
(i) 1回	①Pre	4.257	.125	②Post-1	.054	.098	.583
				③Post-2	-.054	.112	.631
				①Pre	-.054	.098	.583
	②Post-1	4.203	.136	③Post-2	-.108	.127	.397
				①Pre	.054	.112	.631
				②Post-1	.108	.127	.397
(ii) 2-4回	①Pre	4.452	.119	②Post-1	-.286*	.114	.017
				③Post-2	.000	.102	1.000
				①Pre	.286*	.114	.017
	②Post-1	4.738	.077	③Post-2	.286*	.104	.009
				①Pre	.000	.102	1.000
				②Post-1	-.286*	.104	.009
(iii) 5回以上	①Pre	3.870	.191	②Post-1	-.630*	.202	.003
				③Post-2	-.457*	.175	.012
				①Pre	.630*	.202	.003
	②Post-1	4.500	.111	③Post-2	.174	.118	.146
				①Pre	.457*	.175	.012
				②Post-1	-.174	.118	.146

\*p<.05

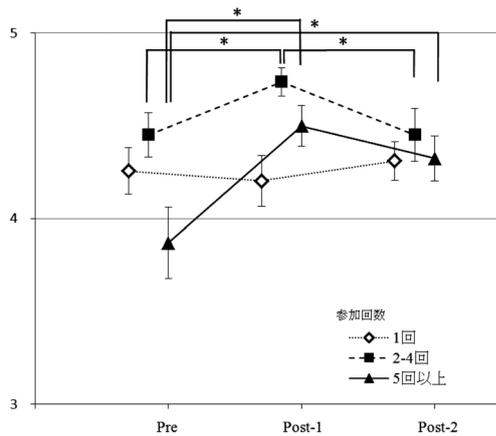


図-1 調和：共感性

これらの結果から、参加1回では事後の効果はみられず、複数回の参加によって「共感性」は高まり、効果の持続性は参加5回以上によって得られる。中でも、参加5回以上の参加者は他者に比べて事後の効果が最も現れており、特筆すべき点である。

### 3.1.2 調和：向社会的コンピテンス

表4・図-2は、「共感性」の能力の自己認知である(2)「向社会的コンピテンス」についての結果である。

(i)参加1回のグループでは、①Pre-③Post-2間において有意に高くなる値を示した。

(ii)参加2-4回のグループでは、①Pre-②Post-1間において有意に高くなる値を示し、②Post-1-③Post-2間において有意に低くなる値を示した。

(iii)参加5回以上のグループでは、①Pre-②Post-1間と①Pre-③Post-2間において有意に高くなる値を示した。

これらの結果から、全ての参加において参加後の「向社会的コンピテンス」は高まり、その持続性は5日以上参加によって得られる。このほか、参加回数が1回であっても1ヶ月後に効果が現れたことは特筆すべき点である。

表4 調和：向社会的コンピテンス

参加回数	調査時期(I)	平均値	標準誤差	調査時期(J)	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率
(i) 1回	①Pre	4.230	.128	②Post-1	-.068	.118	.567
				③Post-2	-.243*	.121	.049
				③Post-2	.4473	.095	①Pre
	②Post-1	4.297	.118	③Post-2	-.176	.119	.145
				②Post-1	.176	.119	.145
				③Post-2	4.286	.150	①Pre
(ii) 2-4回	①Pre	4.167	.152	②Post-1	-.357*	.131	.009
				③Post-2	-.119	.137	.049
				③Post-2	4.286	.150	①Pre
	②Post-1	4.524	.124	③Post-2	-.238*	.117	.049
				②Post-1	-.238*	.117	.049
				③Post-2	4.283	.131	①Pre
(iii) 5回以上	①Pre	3.826	.182	②Post-1	-.630*	.182	.001
				③Post-2	-.457*	.180	.015
				③Post-2	4.283	.131	①Pre
	②Post-1	4.457	.111	③Post-2	.174	.133	.198
				②Post-1	-.174	.133	.198
				③Post-2	4.283	.131	②Post-1

\*p<.05

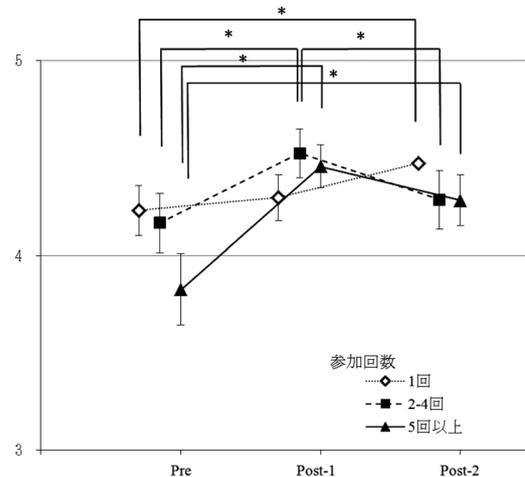


図-2 調和：向社会的コンピテンス

### 3.2.1 独自性：自立感

表5・図3は、自己の欲求を実現し自分らしさを発揮する側面「独自性」のうち、自己の欲求を実現する能力の感情的要素である(3)「自立感」についての結果をまとめたものである。

(i)参加1回のグループ、及び(iii)参加5回以上のグループにおいて、①Pre-②Post-1間と①Pre-③Post-2間で有意に高くなる値を示した。

(ii)参加2-4回のグループでは有意差はみられなかったが、①Pre-②Post-1間で上昇傾向にあった。

これらの結果から、全ての参加者において参加後の「自立感」は高まり、得られた効果の持続性がある。中でも、参加5回以上の参加者は他者に比べて事後の

効果が最も現れており、長期間の参加によって、試行錯誤の中から自身の興味・関心を見出し、自己の欲求を実行に移すことができるようになると推察される。

表-5 独自性：自立感

参加回数	調査時期(I)	平均値	標準誤差	調査時期(J)	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率
(i) 1回	①Pre	3.865	.135	②Post-1	-.392*	.142	.007
				③Post-2	-.405*	.171	.020
	②Post-1	4.257	.116	①Pre	.392*	.142	.007
				③Post-2	-.014	.159	.933
	③Post-2	4.270	.116	①Pre	.405*	.171	.020
				②Post-1	.014	.159	.933
(ii) 2-4回	①Pre	3.881	.145	②Post-1	-.286	.178	.116
				③Post-2	-.238	.140	.096
	②Post-1	4.167	.177	①Pre	.286	.178	.116
				③Post-2	.048	.148	.750
	③Post-2	4.119	.161	①Pre	.238	.140	.096
				②Post-1	-.048	.148	.750
(iii) 5回以上	①Pre	3.587	.175	②Post-1	-.870*	.183	.000
				③Post-2	-.652*	.192	.001
	②Post-1	4.457	.102	①Pre	.870*	.183	.000
				③Post-2	.217	.139	.124
	③Post-2	4.239	.113	①Pre	.652*	.192	.001
				②Post-1	-.217	.139	.124

\*p<.05

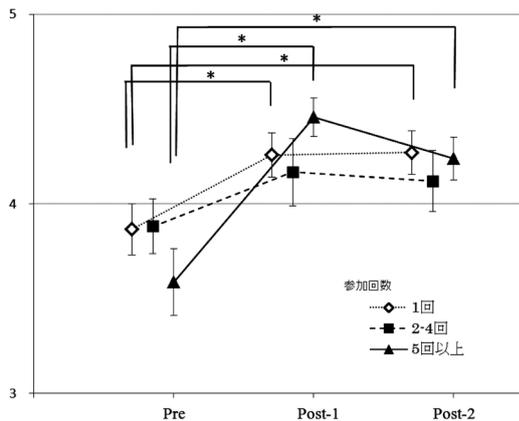


図-3 独自性：自立感

### 3.2.2 独自性：自己効力感

#### 3.2.2.1 自己効力感（失敗に対する不安）

表-6・図-4 は、[自立感] の自己認識としての [自己効力感] を知る因子のうち、(4)-1 失敗に対する不安 についての結果をまとめたものである。なお、集計に際し、この項目のみ負の値が高くなる回答方法であるため、得点の逆転化を行った。

(i)参加1回のグループと (ii)参加2-4回のグループでは、①Pre-③Post-2 間において有意に高くなる値を示した。

(iii)参加 5 回以上のグループでは、①Pre-③Post-2 間と②Post-1-③Post-2 間において有意に高くなる値を示した。

プログラム実施前に感じていた失敗に対する不安感は、全ての参加者においてプログラム終了時から1ヶ月後までに軽減している。これは、当該プログラムが足の届かない海洋における活動を主体としており、これまでに体験したことの無いことへの不安感が無くなったからであると考えられる。

表-6 独自性：自己効力感（失敗に対する不安）

参加回数	調査時期(I)	平均値	標準誤差	調査時期(J)	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率
(i) 1回	①Pre	2.743	.176	②Post-1	.108	.200	.590
				③Post-2	-.514*	.215	.020
	②Post-1	2.635	.184	①Pre	-.108	.200	.590
				③Post-2	-.622*	.213	.005
	③Post-2	3.257	.163	①Pre	.514*	.215	.020
				②Post-1	.622*	.213	.005
(ii) 2-4回	①Pre	2.690	.240	②Post-1	.095	.339	.780
				③Post-2	-.571	.338	.098
	②Post-1	2.595	.253	①Pre	-.095	.339	.780
				③Post-2	-.667*	.265	.016
	③Post-2	3.262	.199	①Pre	.571	.338	.098
				②Post-1	.667*	.265	.016
(iii) 5回以上	①Pre	2.609	.193	②Post-1	-.261	.234	.270
				③Post-2	-.543*	.261	.043
	②Post-1	2.870	.217	①Pre	.261	.234	.270
				③Post-2	-.283	.240	.245
	③Post-2	3.152	.208	①Pre	.543*	.261	.043
				②Post-1	.283	.240	.245

\*p<.05

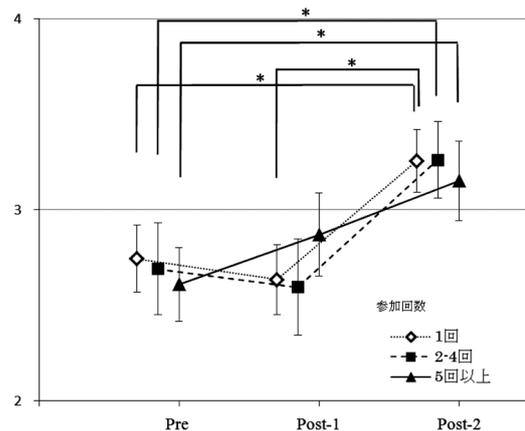


図-4 独自性：自己効力感（失敗に対する不安）

#### 3.2.2.2 自己効力感（能力の社会的位置づけ）

表-7・図-5 は [自己効力感] を知る因子のうち、(4)-2 能力の社会的位置づけについての結果である。

(i)参加1回のグループでは、①Pre-②Post-1 間で有

意に高くなる値を示した。

(ii)参加 2-4 回のグループでは、全ての調査期間において有意差はみられなかったが、①Pre-②Post-1 間において上昇傾向がみられた。

(iii)参加 5 回以上のグループでは、①Pre-②Post-1 間と①Pre-③Post-2 間において有意に高くなる値を示した。

これらの結果から、全ての参加者においてプログラム終了直後の「世の中の役に立てる」、「他者よりも優れた能力がある」と自己認識する気持ちは上昇傾向にあることが推察される。効果の持続性については、5 回以上の参加者において得られる。

表-7 独自性：自己効力感（能力の社会的位置づけ）

参加回数	調査時期(I)	平均値	標準誤差	調査時期(J)	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率
(i) 1回	①Pre	3.189	.152	②Post-1	-.568*	.161	.001
				③Post-2	-.270	.180	.137
	②Post-1	3.757	.130	①Pre	.568*	.161	.001
				③Post-2	.297	.151	.053
	③Post-2	3.459	.144	①Pre	.270	.180	.137
				②Post-1	-.297	.151	.053
(ii) 2-4回	①Pre	3.571	.160	②Post-1	-.143	.209	.498
				③Post-2	.000	.170	1.000
	②Post-1	3.714	.200	①Pre	.143	.209	.498
				③Post-2	.143	.143	.323
	③Post-2	3.571	.167	①Pre	.000	.170	1.000
				②Post-1	-.143	.143	.323
(iii) 5回以上	①Pre	3.087	.178	②Post-1	-.522*	.201	.013
				③Post-2	-.457*	.208	.033
	②Post-1	3.609	.163	①Pre	.522*	.201	.013
				③Post-2	.065	.209	.757
	③Post-2	3.543	.172	①Pre	.457*	.208	.033
				②Post-1	-.065	.209	.757

\*p<.05

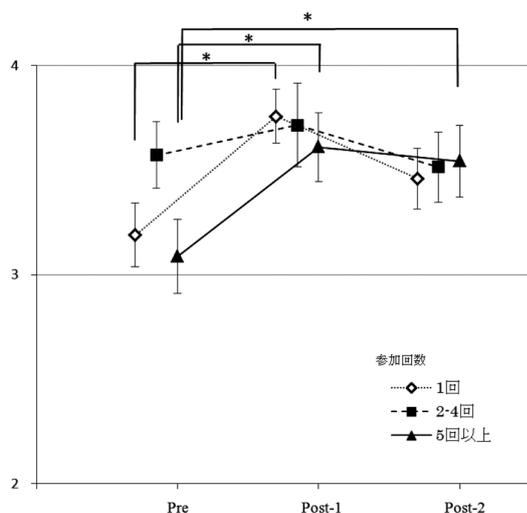


図-5 独自性：自己効力感（能力の社会的位置づけ）

### 3.2.2.3 自己効力感（行動の積極性）

表-8・図-6 は、[自己効力感]を知る因子のうち、(4)-3 行動の積極性 についての結果である。

(i)参加 1 回のグループ、及び (ii)参加 2-4 回のグループにおいて有意差はみられなかった。

(iii)参加 5 回以上のグループでは、①Pre-②Post-1 間で有意に高くなる値を示した。

これらの結果から、行動の積極性は参加回数が 5 回以上によって事後の効果は高まり、その効果が持続する。

表-8 独自性：自己効力感（行動の積極性）

参加回数	調査時期(I)	平均値	標準誤差	調査時期(J)	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率
(i) 1回	①Pre	4.027	.128	②Post-1	-.014	.157	.932
				③Post-2	-.054	.151	.722
	②Post-1	4.041	.134	①Pre	.014	.157	.932
				③Post-2	-.041	.152	.790
	③Post-2	4.081	.107	①Pre	.054	.151	.722
				②Post-1	.041	.152	.790
(ii) 2-4回	①Pre	4.238	.144	②Post-1	.024	.214	.912
				③Post-2	-.095	.136	.486
	②Post-1	4.214	.162	①Pre	-.024	.214	.912
				③Post-2	-.119	.161	.463
	③Post-2	4.333	.139	①Pre	.095	.136	.486
				②Post-1	.119	.161	.463
(iii) 5回以上	①Pre	3.761	.168	②Post-1	-.435*	.178	.018
				③Post-2	-.348	.200	.088
	②Post-1	4.196	.127	①Pre	.435*	.178	.018
				③Post-2	.087	.175	.622
	③Post-2	4.109	.140	①Pre	.348	.200	.088
				②Post-1	-.087	.175	.622

\*p<.05

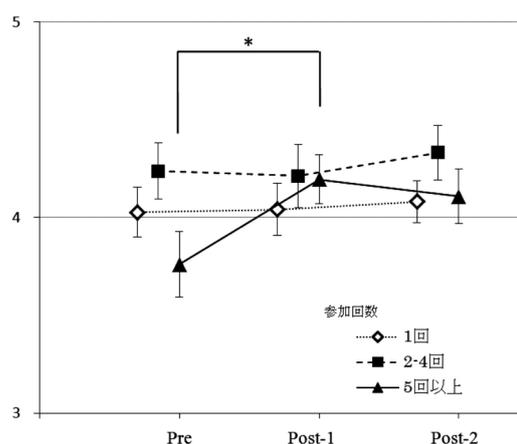


図-6 独自性：自己効力感（行動の積極性）

### 3.3 たくましい社会性

表-9・図-7 は、たくましい社会性について、全ての結果をまとめたものである。

(i)参加1回のグループ、及び (iii)参加5回以上のグループにおいて、①Pre-②Post-1間と①Pre-③Post-2間で有意に高くなる値を示した。

(ii)参加2-4回のグループでは、①Pre-③Post-2間において有意に高くなる値を示した。

これらの結果から、参加回数に関わらず、参加することによって“たくましい社会性”は高まり、その効果は1ヶ月後も持続する。

表-9 たくましい社会性

参加回数	調査時期(I)	平均値	標準誤差	調査時期(J)	平均値の差 (I-J)	標準誤差	有意確率
(i) 1回	①Pre	3.714	.063	②Post-1	-.151*	.062	.015
				③Post-2	-.261*	.066	.000
	②Post-1	3.865	.062	①Pre	.151*	.062	.015
				③Post-2	-.110	.065	.090
	③Post-2	3.975	.055	①Pre	.261*	.066	.000
				②Post-1	.110	.065	.090
(ii) 2-4回	①Pre	3.833	.076	②Post-1	-.159	.086	.065
				③Post-2	-.171*	.077	.027
	②Post-1	3.992	.083	①Pre	.159	.086	.065
				③Post-2	-.012	.070	.864
	③Post-2	4.004	.069	①Pre	.171*	.077	.027
				②Post-1	.012	.070	.864
(iii) 5回以上	①Pre	3.457	.078	②Post-1	-.558*	.081	.000
				③Post-2	-.486*	.083	.000
	②Post-1	4.014	.068	①Pre	.558*	.081	.000
				③Post-2	.072	.071	.311
	③Post-2	3.942	.067	①Pre	.486*	.083	.000
				②Post-1	-.072	.071	.311

\*p<.05

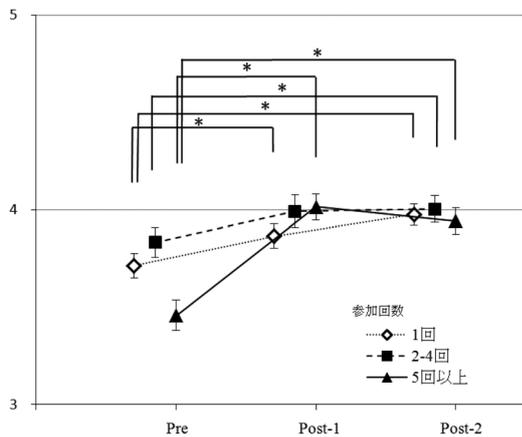


図-7 たくましい社会性

#### 4 まとめ

本研究は、通い型で且つ長期間継続的にジュニア・ライフセービング・プログラムを実施していた、萩サーフ・ライフセービング・クラブが主宰する「萩ッズ

セーバー」に着目し、プログラムに参加した幼児・児童のたくましい社会性に及ぼす効果とその持続性について明らかにすることを目的としていた。

本研究は次のようにまとめることができる。

たくましい社会性を構成する要素である「調和」の側面については、本研究では他者との関係を築く感情的側面である[共感性]、及び共感性の能力の自己認知である[向社会的コンピデンス]の2面から分析を試みた。結果は、複数回の参加によって他者と強調する「調和」の効果は高まり、その持続性は5日以上継続した参加によって最も効果が得られた。

つづいて、2つめの要素である「独自性」については、本研究では自己の欲求を実現する能力の感情的側面である[自立感]、及び自立感の自己認識である[自己効力感]の2面から分析を行った。結果は、行動の積極性を除き、全ての参加者において事後の効果と持続性が確認できた。また、1回の参加であっても効果の得られる要素があることが判り、「独自性」の効果と持続性は参加することで得られた。

そして、たくましい社会性に及ぼす効果と持続性について総括すると、全ての参加者において効果と持続性が得られるプログラムであることが判った。

なお、自然体験活動の成果は、その継続性と反復によって定着していくと考えられる。本稿における考察から、参加回数が少ない場合であっても事後の効果と持続性の得られる要素があることが確認できたが、それらは継続した参加（複数回の参加）によってより効果が現れている。したがって、「萩ッズセーバー」のプログラムにおけるたくましい社会性の効果と持続性は、継続した参加がより望ましいと結論する。

おわりに、今後は質問紙の再検討や他ジュニア・ライフセービング・プログラムとの比較検討を通した分析を行うことが課題であり、それら実施の効果についてより多くの知見を積み重ねることが望まれる。

〔註〕

註1 生きる力とは、「いかに社会が変化しようと、自分で課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、行動し、よりよく問題を解決する資質能力」であり、また、「自らを律しつつ、他人とともに強調し、他人を思いやる心や感動する心など豊かな人間性」、「たくましく生きていくための健康や体力」によって構成される<sup>引1)</sup>。

註2 ライフセービングは「人命救助」と直訳される。日本ライフセービング協会は、ライフセービング活動の概念を、広義には「一次救命を本旨とした社会的活動」、狭義には「水辺の事故防止のための実践活動」と定義づけしている<sup>引2)</sup>。

註3 夏季期間中に毎日ジュニア・ライフセービング・プログラムを実施しているところは全国2箇所所在。1箇所は、特定非営利活動法人ウォーターワイズ<sup>38)</sup>が沖縄県本島北部のJALプライベートリゾートオクマ（沖縄県国頭郡奥間）において主宰している「オクマわんぱく教室」で、通い型（非宿泊型）のプログラムを夏休み期間中毎日開催している。2箇所目は、萩サーフ・ライフセービング・クラブ<sup>39)</sup>が菊ヶ浜海水浴場（山口県萩市堀内）において主宰している「萩ZZサーバー」で、前者同様、通い型（非宿泊型）のプログラムを7月の海の日から8月下旬まで毎日開催している。（著者調べ）

註4 野外教育とは、「自然の中で組織的、計画的に、一定の教育目標をもって行われる自然体験活動の総称」と定義しており、「青少年を対象とした野外教育は、知的、身体的、社会的、情緒的成長、すなわち全人的成長を支援する有効な教育である」とまとめている<sup>引3)</sup>。

註5 「我が国の野外教育プログラムの期間は、2泊程度と比較的短期間に止まっている。このような状況下では、限られた日程の中で、できる限り多く

の活動を実施したいという要望が生じ、結果として、一つ一つの活動への時間配分が不足し、時間内に活動を終わらせるために、指導者が手とり足とり教えがちとなる。青少年に、試行錯誤の中から体験的に学ぶ時間的ゆとりを与えるためにも、実施期間の長期化や、ゆとりある活動時間の配分について改善することが必要である。また、一般に、野外教育プログラムは1～2度体験すれば十分であると考えられる傾向にある。しかし、野外教育の成果は、その継続と反復によって定着していくものと言える。したがって、学校、青少年教育施設、民間団体等において、様々な野外教育プログラムを提供するとともに、年齢や経験・関心に応じて、青少年が、継続的、段階的に野外教育プログラムに参加することができるよう機会の拡充を図る必要がある。」<sup>引3)</sup>

註6 「野外教育の重要性への理解を深め、その普及・定着を図るためには、これまでのような主観的、経験論的な評価だけではなく、例えば、野外教育プログラムにおける体験が、日常生活への意識・態度に及ぼす影響や交友関係の変化など、教育学、心理学、社会学等、それぞれ専門分野からの客観的な効果分析・評価研究が積極的に実施されることが必要である。（後略）」<sup>引3)</sup>

註7 津久井は、二宮ら<sup>25-30)</sup>による一連の研究結果を基に、たくましい社会性に関する尺度から、自立感5項目、共感性7項目、向社会的コンピテンス10項目を抽出。続いて、飯田ら<sup>14)</sup>による一般性自己効力に関する尺度から、自己効力感（失敗に対する不安7項目、能力の社会的位置づけ4項目、行動の積極性4項目）を抽出。延べ計37項目について調査を行い、因子分析を行っている。このうち本研究においては、因子分析結果の負荷量の高かった各因子上位2項目（計12項目）の質問を本研究において抽出、質問項目として採用した。

[参考文献]

- 1) 千原英之進・小峯力・深山元良；ライフセービングと社会福祉. 学文社：東京，1997.
- 2) 千原英之進・小峯力・深山元良；ライフセービングー歴史と教育ー. 学文社：東京，2002.
- 3) 遠藤大哉；日本におけるジュニア・ライフセービングの教育プログラムに関する一試案. 日本体育大学紀要，28（2）：191-199，1999.
- 4) 小峯力；海洋教育による安全の自立性への期待ーライフセービング教育の展開と課題ー. 沿岸域学会誌，17（2）：48-50，2004.
- 5) 丸田重夫；ライフセービング教育の可能性. 保健体育教室，3：12，2008.
- 6) 日本ライフセービング協会編；平成19年度ジュニア・ライフセービング教育指導指針. 日本ライフセービング協会：東京，2008.
- 7) 文部科学省（1996）政策・審議会：審議会情報：調査研究協力者会議等（スポーツ・青少年）：国立青少年教育施設の在り方に関する検討会：国立青少年教育施設の在り方に関する検討会（第2回）配付資料：資料 2-1「青少年の野外教育の充実について」（抜粋）（青少年の野外教育の振興に関する調査研究協力者会議報告書）（平成8年7月24日），1996.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chousa/sports/010/attach/1301831.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/sports/010/attach/1301831.htm)，（参照日 2017年11月1日）
- 8) ニノ宮克美；たくましい社会性を育てる. ニノ宮克美ほか編，たくましい社会性を育てる. 有斐閣：東京，pp. 171-186，1995.
- 9) 青木康太郎；長期キャンプ体験における参加者の対人能力の変容に関する研究. 大阪体育大学紀要，33：94-96，2002.
- 10) 針ヶ谷雅子ほか；長期キャンプ経験が参加者の感性に及ぼす効果. 日本体育学会大会号，46：512，1995.
- 11) 平野吉直・結城光夫・山岸寿子；長期キャンプ参加者の自主性の変化について. 日本体育学会大会号，41（B）：615，1990.
- 12) 松田幸也；長期キャンプ体験における自己成長性・自己効力感の変容と感情に関する一考察. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要，5：225-237，2005.
- 13) 飯田稔・井村仁・van der Smissen；冒険キャンプにおける小中学生の自己概念と不安の変容. 筑波大学体育科学系紀要，9：91-101，1986.
- 14) 飯田稔・坂本昭裕・石川国広；登校拒否中学生に対する冒険キャンプの効果. 筑波大学体育科学系紀要，13：81-90，1990.
- 15) 飯田稔・関根章文；キャンプ経験が児童の一般性自己効力に及ぼす効果. 筑波大学体育科学系紀要，15：93-102，1992.
- 16) 関根章文・飯田稔；キャンプ経験が児童の自己概念と一般性自己効力に及ぼす影響. 筑波大学体育科学系紀要，19：85-89，1996.
- 17) 橘直隆・平野吉直・関根章文；長期キャンプが小中学生の生きる力に及ぼす影響. 野外教育研究，6（2）：45-56，2003.
- 18) 山本義史・杉浦義雄；自然体験キャンプが児童の心理的健康および自然観に与える効果（3）ー自然体験に伴う感覚・感性評価の試みー. 日本教育心理学会総会発表論文集，42：491，2000.
- 19) 山本義史・杉浦義雄；自然体験キャンプが児童の心理的健康および自然観に与える効果（7）ー自然体験中および帰宅3ヶ月後の効果ー. 日本教育心理学会総会発表論文集，43：411，2001.
- 20) 山本裕之・平野吉直・内田幸一；幼児期に豊富な自然体験活動をした児童に関する研究. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要，5：69-80，2005.

- 21) 津久井伸明；キャンプが児童の社会性に及ぼす影響. 広島大学大学院教育学研究科心理学専攻修士論文 (未公刊), 1998.
- 22) 渡邊仁・飯田稔；キャンプ経験が女子高生の自己概念に及ぼす効果ーキャンプ中の体験の変化に着目してー. 日本野外教育学会第6回大会研究発表抄録集, 65-66, 2003.
- 23) 茂呂輝夫；自然体験活動と生きる力の関連性ーオータムキャンプの参加群と対照群との比較ー. 国立青少年教育振興機構青少年教育研究センター紀要, 3:100-108, 2014.
- 24) 瀧直也・平野吉直・寺沢宏次；キャンプが子どもの大脳活動と「生きる力」に及ぼす影響. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, 5:45-55, 2005.
- 25) 二ノ宮克美・首藤敏元・山岸明子；たくましい社会性に関する研究 (1). 日本教育心理学会総会発表論文集, 36: 59, 1994.
- 26) 二ノ宮克美・首藤敏元・山岸明子；たくましい社会性に関する研究 (2). 日本教育心理学会総会発表論文集, 36: 60, 1994.
- 27) 二ノ宮克美・首藤敏元・山岸明子；たくましい社会性に関する研究 (3). 日本教育心理学会総会発表論文集, 36: 61, 1994.
- 28) 二ノ宮克美・首藤敏元・山岸明子；たくましい社会性に関する研究 (4). 日本教育心理学会総会発表論文集, 36: 417, 1995.
- 29) 二ノ宮克美・首藤敏元・山岸明子；たくましい社会性に関する研究 (5). 日本教育心理学会総会発表論文集, 36: 418, 1995.
- 30) 二ノ宮克美・首藤敏元・山岸明子；たくましい社会性に関する研究 (6). 日本教育心理学会総会発表論文集, 36: 419, 1995.
- 31) 吉田嗣治ほか；ウォーターワイズプログラムの実践. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, 3: 131-138, 2003.
- 32) 久保和之ほか；ウォーターワイズプログラム参加者における自己効力感の変化. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, 3: 139-144, 2003.
- 33) 青木康太郎ほか；水辺活動におけるウォーターワイズプログラムが児童の生きる力に及ぼす効果. 野外教育研究, 8 (2) :59-70, 2005.
- 34) 青木康太郎・酒井哲雄・植木弥生；ウォーターワイズにおける教育効果に関する研究. 国立オリンピック記念青少年総合センター研究紀要, 7: 29-40, 2007.
- 35) 谷井淳一・藤原恵美；小・中学生用自然体験効果測定尺度の開発. 野外教育研究, 5(1):39-47.
- 36) 成田健一ほか (1995) 特性的自己効力感尺度の検討ー生涯発達の利用の可能性を探るー. 教育心理学研究, 43 (3) :306-314, 2001.
- 37) 橘直隆・平野吉直；生きる力を構成する指標. 野外教育研究, 4 (2) :11-16, 2001.
- 38) 特定非営利活動法人ウォーターワイズ. <http://www.waterwise-co.com/キッズウォータープログラム/> (参照日 2017年11月1日)
- 39) 萩サーフ・ライフセービング・クラブ. <http://hagilsc.wixsite.com/index/kids> (参照日 2017年11月1日)

#### [引用文献]

- 引 1) 文部科学省：政策・審議会：審議会情報：過去の中央教育審議会：文部省審議会答申等 (21世紀を展望した我が国の教育の在り方について (中央教育審議会第一次答申))：第1章社会の変化に対応する教育の在り方, 1996.  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/old\\_chukyo/old\\_chukyo\\_index/toushin/attach/1309612.htm](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_chukyo_index/toushin/attach/1309612.htm) (参照日 2017年11月1日)

引 2) 日本ライフセービング協会編；サーフライフセービング教本(改訂版). 大修館書店:東京, pp. 2-16, 2013.

引 3) 前掲, 参考文献 7).

## **Effect of the Long-term “Junior Surf Lifesaving Program” Experience for Kindergartener and Elementary students.**

Takaharu KUNIKI

Abstract :

The purpose of this study was to examine the effects (before program, immediately after, and one month after) of junior surf-lifesaving experience upon elementary and junior high school children in a 1 month program "Hagi kids-saver" conducted in 2016 summer at Hagi city, Yamaguchi Prefecture. Subjects were 81 participants from 4 to 12 years.

The following results were obtained.

The program participants improved in zest for living, particularly long-term participants better than 1-time participants, and immediately after and one month after.